(3) 重い障がいのあるヒサ坊が、何故「わが師」「家族の宝」「社会の宝」になったのか ―北浦雅子の生涯―

施設長　福田 雅文

天然痘ワクチン後脳炎で、重い障がいを残したヒサ坊は、悲嘆にくれる母・雅子に、無言の姿で「生きるとは何か」「人生の幸せとは何か」を問いかけ続けた。雅子にとって、ヒサ坊の笑顔が唯一の喜びであった。雅子は苦悩のなかにもヒサ坊の将来を考え、救いを求め続けていた。悲しみ包まれ、固い殻に閉じこもった雅子は、運命的な出会いを重ねて、希望の光が輝き始める。

最初は当時では珍しく障がいについて詳しい女性の方との出会いであった。その方とは姉妹のように心が通じ合う仲となった。その方から雅子の置かれている境遇を心配して、同じ悩みをもつ母親たちの集まりをつくったらと助言された。

雅子は福岡の街を訪ね歩いて 20 人程度の母親の会「みのり会」をつくった。この「みのり会」の活動は雅子の悲しみを和らげ、同じ苦しみを味わっている母親たちとの語らいで、自分自身が救われ喜びとなり、多くのこと学ぶ機会となっていった。この活動がその後の「全国重症心身障害児(者)を守る会」の活動の布石になったと思う。

次の出会いは古川泰竜先生という刑務所で服役中の方や死刑囚を教え諭す教誨師をされている方だった。この方の深い思慮から生まれた言葉は、雅子にとって衝撃的だった。「神仏を恨み、悶え苦しむのは、あなた自身の心のなかに問題が・・」「痙攣によって坊やは、本当の人間の道をお母さんに教えようと・・」「坊やの言葉にならぬ声も、聴くものの心次第で尊いお聡の言葉として聞くことも・・」と、雅子の心の持ち方に問題があるのではと諭されたのだ。とても受け難い言葉であった。それからはヒサ坊の前で何時間も何日も自分に問いかけ続けた。そして、「私がいまここで、自分自身の心の在り方を変えない限り、ヒサ坊は永久に幸せにはならない…」と自分を追い詰めていき、絶体絶命の中から生き方を変えることを決意する。

そして、ヒサ坊の存在を原動力として、雅子自身の新しい人生観、新しい生き方を見出していった。「ヒサ坊の現実を家庭でも社会でもプラスになるように生かし、ヒサ坊が人間としての役目を立派に果たすことになるようにすること」が「母親としての責任」であり、「私たち一家の使命でもある」とまで言い切った。心のあり方を変えたことで「人生のよろこび」を、あらためて感じることができるようになった。

この心の転換で、ヒサ坊のことに限らず、日常の人間関係、社会問題、さらには生活上の悩みなど、数多くの問題に対してゆとりをもって、自分自身を眺めることが出来るようになった。ヒサ坊によって教えられ、育てられた。雅子自身がヒサ坊に育てられたことに気づく。

「みのり会」でお母さん達と会う機会が多くなって、他のお母さんたちからいろんな話を聞くようになった。「重症ですが、うちの子どもは我が家の宝です」「障がい児がいたお陰で、一生懸命働いてある程度財産ができました。うちの子は福の神です」「こうした子どもをもったお陰で私は幸せを教えられました。子どもへのお礼のつもりで、社会のためにつくさなければ・・・」と、障がいのある子どもたちが、家族や社会に立派に役に立つ存在であることを確信することになった。

「障がいのある子がいたからこそ、親たちがそうした考えに至った。そうすると『障がい児が立派な人づくりをした』といっても過言ではない。」という結論に至った。さらに「弱い人たちが、ささやかなサインを送っている。そのサインを受け取るためには、私たちの方に優しい気持ちと思いやり、そして素直な気持ちがないと出来ない。そういう中で私たちは育てられている。」ということにも気づかされた。無言のヒサ坊と共に生きることで、夫婦も心を通わせ、人間の幸せ、人生の喜びも教えられた北浦家でも「ヒサ坊はわが師」「家の宝」となっていった。

一方、施設の見学に来る学生たちは初めてみる重い障がいのある子どもが必死で生きる姿をみて、「かわいそうだ」「どうしてこんな変なのばかり集めるのだろう」「人生とはいったい何だろうか」と考えさせられた。感じ方は人それぞれ違っても、解くことのできない人生の根本的問題に直面させられていた。ある非行少年たちは「ぼくらは身体が丈夫なのに、悪いことばかりをしている。本当に悪かった」と心から後悔し、その後、施設の子どもたちにお金を送ってくれるようになった。

このような経験を重ねるうちに「重症児は社会の宝」でもあると確信して、救いを求めるだけでなく、障がい児が立派な人づくりをするので「この子たちを通して、世の中を変えていきたい」という気持ちで活動を展開していく。守る会は総力をあげて全国の親の声を集めて、社会から共感を得られる運動を展開し、国や社会に訴えた。結果的には現在に至るまでの重い障がい児者の福祉政策に多大な貢献をされてきた。

ヒサ坊に生ききった『雅子の願い』は、「この子どもたちから教えられた『温かい心』『思いやりの心』を社会に呼びかけ、この『心の輪』をひろげていきたい。そして、死ぬときは『たしかに、愛を果たすことができました。私の人生は充実していました』といいきれるようになりたい」と念願し、2023 年 2 月 26 日 101 歳で旅立つまで守る会の会長を務められた。

北浦雅子さんは本当に見事な人生を送られた。感謝を込めて、拍手を送りたい。